



誰でも使える天体望遠鏡

浅田英夫 著

地人書館 1,800円+税 144頁

解説書

お薦め度

3

☆☆☆★★

本書は、その題名から想像されるであろう、天体望遠鏡の使い方や天体導入時のポイント・見え方などの実技面のみに特化した内容だけではなく、望遠鏡の仕組みから歴史まで、望遠鏡にまつわる幅広い知識も取得できる内容となっている。実際のフィールド上で望遠鏡を触りながら使う本として、見開き1ページで一つの節がコンパクトにまとめられており、ちょっとやさそとの湿気では負けない厚手で丈夫な紙質で制作されていることがたいへんうれしい。残念ながらカラーではなく2色刷りだが、写真や図が豊富に使用されているので、それを追っていくだけでも自然と望遠鏡の組み立てや手入れなどがわかる。「これだけは見ておきたい天体」の章でも、山間地や市街地での見え方の違いなどが写真で示されているので、望遠鏡を使って見ると、どのように見えるのかというイメージが湧きやすい。ひとたびページをめくれば、初心者でも「やってみよう」という気持ちが湧いてくるのではないだろうか。望遠鏡を学ぶ際に苦手分野となりうる物理的な内容も、普段の生活で体験するような事柄を挙げながら話を展開しているのでわかりやすい。なかでも「口径が大きいほど集光力がある」という話を雨どバケツを用いて説明していた箇所は、今後自身の天文台での解説時にもぜひ使用したいと感じた。

小さい頃から天文好きで、天体望遠鏡に慣れ親しんでいる学生やアマチュアの方には物足りない内容かもしれないが、望遠鏡初心者が基礎的な情報を得るために使用したり、久々に望遠鏡を使う際に忘れかけていた事柄を調べたりする場合には、便利な一冊といえるだろう。また、望遠鏡初心者に向けてどのような話をすればよいか迷った

場合にも、本書はきっと役立つだろう。

そんな盛りだくさんの内容となっている本書だが、読み進めているときに二つだけ歯がゆく感じた部分がある。一つ目は、本書を逆引き的に使用しようとする時、時折ほしい知識にたどりつけないことがある点である。目次を開くと「天体望遠鏡の超基礎」と「望遠鏡の基礎」という同じような表題の章が存在し、違う章の節どうしも「いろいろある望遠鏡の仲間」と「星の数ほどある望遠鏡」というような、一見するとどちらに自分が必要としている情報があるのかわかりづらい箇所が存在する。見開き1ページに1内容というコンパクトな構成となっているだけに、逆引き的に使用しづらいことがあるのが残念でならない。二つ目は、本書を始めから順序よく読み進めていくと「見える範囲: $0.5^\circ \sim 0.3^\circ$ 」「口径」など、初心者が戸惑うかもしれない表現や用語が急に登場することがまれにある点である。本書を最後まで読み切れば、そのどこかには説明が載っているのだが、全部読み切るまでにストレスを感じることもあるかもしれない。本書には用語集や索引が存在しないため、全体の内容を検索できる箇所が目次しかない。そのことがよけいにこのような歯がゆさを生んでしまうのだろう。

本書を使用する際は、始めから終わりまで一通り読み切り、どこに自分の欲しい情報が載っているかを把握するまで使い込むことをお薦めする。そうすればきっと天体観測時や手軽な知識取得の生涯の友として活躍することだろう。

渡邊瑛里（兵庫県立西はりま天文台公園

嘱託研究員）